

放送担当記者を招いて

放送作家の全貌をPR

■ お互いの理解を深めるために ■

多彩な顔を持つ放送作家

横光 今日(17)は新聞記者の方たちに放送作家についておおいに知っていただきたい、また、われわれの知らない放送事情をきかせていただきたい。そして放送をよりよくすることにお互いに役立てたい、そういう狙いの集りです。

田井 本日はお忙がしい時間を割いていただきまして有難うございました。肩のこらない、くつろいだお気持ちでよろしくお願ひします。

かのう 私たちは日ごろ書齋にとじこもって外のことに関して不勉強なので、機会ある度に外の方と交流を深め、こういう集りをもちたいと思つてます。今日はその第一段階だと思つてごゆっくり御歓談ください。私たちの協会を簡単に説明します

横山 ドラマについて教えていた

きたいたのですが、一日に帯ドラマ十本、普通のドラマ七〜八本という計算で、一週間に一三〇本ぐらいドラマがある。そんなところでよろしいんでしょうか。

横光 それぐらいだと思います。

横山 それを何人ぐらいのライターで書いてるわけですか。

横光 だぶっている人もあるんで

一人でも何本も持つてる人もあります。

松田 協会の中で、放送作家の仕事だけで食べておられる方というのは全体のどれくらいを占めているのですか。

かのう 正確な数字は把握し難いですが、スタジオドラマ専門に書いてるのが五〇人、テレビ

ラジオ、だぶっている人も勿論いますが……テレビの構成番組

が百人くらい、あとはドキュメント、教育番組、演芸番組関係

は二〜三〇人だろうと思います。合計しますと三百人から四百人

というところでしょうか。

佐藤 協会と組合とがあります。その関係はどうなっているのですか。

横光 協会の方はいわば文化面と

どうか文化関係の活動を、組合の方はこれは協同組合で、利益関係を重点にして運営されています。

かのう ここでわれわれがどういう仕事をしているか、出席者の自己紹介をさせていただきます。

(協会側出席者全員、個々のジャンル、現在の仕事ぶり、番組名などを交えて自己紹介)

脚本料の差はどうして？

松田 横光さんはラジオドラマを書いておられました。ラジオはテレビドラマよりむずかしい面もあるというのに、脚本料に差がありますね。

横光 ええ、NHKでいうと、私

は十分の一くらいです。だから

ラジオの仕事はだんだんしなくなつて、新人が出てくるわけ

ですが、実際はラジオの方がむずかしいんでしてね。

岡本 ラジオの場合、構成料を千円上げるか上げないかは大変なことなんです。こっちの方が

カバカしくなってくるくらいです。

岩切 ラジオとテレビでギャラの差があるということですが、外

とき、昭和五十二年十一月十五日

午後六時—九時

ところ、渋谷・万葉会館

新聞社側・出席者(敬称略)

岩切保人(サンケイ新聞家庭文化局)

坂本洋(朝日新聞編集委員)

佐藤精(毎日新聞編集委員)

松田浩(日本経済新聞電波報道部)

横山岑生(読売新聞文化部)

吉池節子(東京新聞放送芸能部)

協会側・出席者

伊馬春部、上野一雄、江上照彦

大川タケシ、大倉徹也、岡田光治

岡本克己、片山明子、かのう・あ

らた、神津友好、小島貞二、塩川

寿一、城悠輔、宋景子、田井洋子

辻真先、寺島アキ子、額田やえ子

本田暁、毛利恒之、盛善吉、森永

武治、横光晃(事務局高橋よし)

国ものの翻訳と、テレビの翻訳

の場合はどうですか。

額田 原作物の翻訳の場合は七割

ですか。テレビの場合は、どの

局もプロダクションから買っ

ています。組合に入っている私

ちは正当な要求ができるので

す。が、他の人達はお互いにむしり

あつて感じる(笑)というの

は要求すると他の関係者に影響

(2) が及んでくることになります。

例えば、アテレコというのがありますが、アテレコが非常に安いんです。アテレコの問題は金の問題ととってもいいくらいで、時間をかけられない。そこで質も落ちるということなんです。

横山 読売の横山です。今日はお招きありがとうございます。私は「横」というネームで書いています。

佐藤 毎日新聞のコラム「S」担当の佐藤です。私は放送の取材を長くしていて、局や出演者とはよく話しますが、作家の方とはあまり話したことがありません。こういう会にお招きいただいたことを感謝しています。

吉池 東京新聞の吉池です。今日いろいろ教えていただきました。と思います。ついつい、テレビ局の広報で宣伝記事を書く場合が多いので反省しています。放送作家の方々の本音をお聞きしたいと思っています。

坂本 朝日の坂本です。二十年ほどで放送関係は長いのですが、東京に来て五年になります。NHKの賃金、会長交替問題みたいな事ばかりやっていて、これではダメだと、「テレビ人語録」というコラムを作りました。取材にまわっていますが、ちょうど今日の集りで、ぜひ、話を聞かせていただきたい、という方が何人かあります。

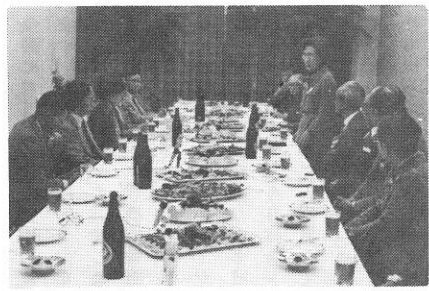
松田 日経の松田です。よろしくか。お互いを知ったところで本田さんから、教育番組を代表して、お話をはじめていただきたいと思っています。

本田 私は「四つの目」という番組をつくりました。テレビの目は時間の目、現実の目、透視の目、拡大の目の四つの目をもつということ、これ以上のものはないと思いたけです。

でも科学番組をやっていると一般の娯楽番組にどうしてもコンプレックスを感じます。昔、NHKでは学校放送は吹きだまりといわれました。一番ダメなのが集るところだと、ライターもそうだと……。しかし視聴率からいうと理科番組などは九〇何%です。ところが文部省がきめたカリキュラムに対抗した番組をつくると、学校の方はそれを利用しにくいということになる。私が番組をつくる時にいつも思い浮べるのは、差別的な

(3) いい方ですが、山の中の学校の

靴下がずりおちそうな女の先生です。そんな先生が教えるよりは、自分のつくった番組の方がずっといいだろうと思うのです。本来は、学校放送というテレビ番組がなくなった方がいいわけです。優秀な先生が教えた方がいいわけですから。ところが優秀な先生がいなくても番組が必要になるのです。



NHKでは報道と教育の二本柱を看板にしていますが、教育はほんの爪楊枝です。ドラマをどんなやると貢献度が高くなるとランクが上りますが、教育の方はなぜかおとされていくわけです。学校放送は文部省に従って

いるということですが番組自体にも問題があります。それ以上の問題が片方にあるという事です。面白いといえば教育番組ほど面白くない。ま、それだから面白くない、やっていくわけでは

構成と一口にいうけれど

坂本 構成者というのがよくわからないんですが、構成という仕事は一体、何をやるのか、プロデューサーやディレクターの怠慢が故に、そういう分野があるんじゃないか、怠慢を補うのではないかと質問して、おこられたことがあるのですが(笑) 毛利 いわゆるスクリーンライターというのがありますね。コメントーターみたいな構成者もありませんが、構成は映画の監督みたいな面も持っています。企画から番組進行まで受けもつわけですから。また、構成者はドラマを書かないライター、という偏見がある気がします。ディレクター、プロデューサーのアシスタントであるという考え方があるのは間違いだと思えます。

本田 構成者の理想的な姿は、そこに登場する人物の細かいセリフまで書くのです。そしてどんな消して最後には白紙にしてこの人の次はこの人、というふうにする。方程式はあくまでもざさない、何を一番はじめにどうして、どう終るかの方程式をたてるのが構成者だと思います。構成は作構成、企画構成というように便利な言葉で、多様

毛利 以前は放送作家はドラマを

書く作家ということでしたが、今は放送にかかわりを持ち、放送をつくっていくのが放送作家だと見るべきだと私は思います。森永 構成ができたのは——大体これは元はNHKでは職員がやっていたんです。構成作家は戦後出てきたので、アメリカのやり方を真似たんです。NHKに脚本部ができ、その中に構成の

ポジションができました。そして職員がやっていたものを外部の人の協力をお願いするようになりました。これが構成のはじまりなんです。

大倉 異論を申し上げますが、構成について一言いわせていただきます。ムーランルージュで御承知のように、軽演劇とショーを合わせたようなものを作っていたときに、ショーの作者がやるのを構成と呼ばれたと承知しています。日本テレビの場合、ミュージシャンから転向してきてディレクターがいます、その人達の頭にあるのがアメリカのショーでした。そのディレクターがショー番組を作り出したときに構成という言い方を使っていたと思います。当時は作・構成というのが一般に使われていました。それまではビッグショーなど、ドラマ以外の構成も作っていました。脚本だたりしてました。例えば「光子の窓」など、

コントがあつて歌があつてというのが一般に使われていました。ある時点から民放に構成という部分が出てきたのです。脚本はドラマ以外は構成と言われるようになってしまったんです。構成という仕事はなんだろうかと質問をよく受けるんですが、これは番組によっても違いますが、中でもディレクターとライターのかかわり方によつてもちがうし、ドラマ以外のすべて——報道も含めて、物書きのかかわり方は全部ちがうんです。局の現場に行つて見るのが一番よくわかります。現場でどういうふうにかかづりあっているかがおわかりになります。構成台本だけですませる構成者もいるし、一人一人の構成者によつて全部ちがう方がちがう。これが構成というタイトルが出てくる現象です。

新聞批評に文句いいたい

城 十八年前に協会ができたとき局の力が強くて作家にランクをつけた。一番下にテレビ屋

といふのがいて、番組をつくるためのいろんな材料を探してくるんです。その上に書き屋といふのがいて、その上に組み屋といふのがいます。ここまでは原稿料じゃないんです。その上にこれらをつむぐる作家がいます。呼ぶ名はみんな先生です(笑)

十八年経つても放送作家の地位は認められず、新聞も名前をとりあげてくれない、ひどいよ。岩切 楽屋裏をいいますと、新聞のテレビ欄の番組や解説は、新聞社は全然タッチしてないんです。かかづりあっているといふか。基本的には各作家が個性的なドラマを書いていけば、この人のドラマはこうだということに紹介するように思いますが、一般的には作家より、出演者で見ようという方が強いんじゃないですか。基本的には各作家が個性的なドラマを書いていけば、この人のドラマはこうだということに紹介するように思いますが、一般的には作家より、出演者で見ようという方が強いんじゃないですか。

坂本 要するにこの作家が書いたドラマだということには名前が入っていると思いますが、一般的には作家より、出演者で見ようという方が強いんじゃないですか。基本的には各作家が個性的なドラマを書いていけば、この人のドラマはこうだということに紹介するように思いますが、一般的には作家より、出演者で見ようという方が強いんじゃないですか。

岩切 新聞のテレビ欄の場合は、番組名やレギュラー出演者など変らない活字をいれるんですよ、便利だからね。毎日変わるのはいれないんですよ。

城 新聞の批評欄ですけど、クソの作家もいますね(笑)。作家の場合もいろいろありますが、クソの作家もいますね(笑)。作家の場合もいろいろありますが、クソの作家もいますね(笑)。

上野 あなた方は、はじめから職業意識で見ているのじゃありませんか。ちかごろは感動するドラマがありませんか。すみません(笑)



城 十八年前に協会ができたとき局の力が強くて作家にランクをつけた。一番下にテレビ屋といふのがいて、番組をつくるためのいろんな材料を探してくるんです。その上に書き屋といふのがいて、その上に組み屋といふのがいます。ここまでは原稿料じゃないんです。その上にこれらをつむぐる作家がいます。呼ぶ名はみんな先生です(笑)

神津 いろいろの、つまり演芸評論家も演芸作家も非常に少ないです。それに以前は、仲間うちに

もコンプレックスを持っておりなり手がなかったのですが、いまは、作家教室やなんかでもいろいろのとおりあげたり、若い人たちの志望者が増えています。こういう世界は信用の世界です。から、ポッと入るわけにいかないんです。演者を知り、小屋を知り、演目を知って小まめに歩いて、或いは歴史的なことも知らなきゃならない。時間がかかって、そして一旦入るとなかなかぬけられません。

新聞の批評なんかの場合、おかしなところ、どこに向って主張しているのか疑問に感じることがあります。むしろ投書欄のシロウトの人のいろいろのに対する考えの方が胸に刺さります。参考にもなるわけです。ところが専門家の書いたものは参考にならない。トンチンカンなんです。見当がいのところを見ているんじゃないか、って気がします。

私は構成のような裏方の仕事とともに、漫才、落語、講談といったものを全部書くと、私もオリジナルで書いています。私はこの道二十五年になります。が、漫才などは二十五年前のものがいまだに演じられているものもあります。大衆演芸を書く立場からいうと、面白ければいいのであって、啓蒙しようとか教育しようとかいうものではないと思つてます。ぼくらの作り方としては、誰もが納得できて誰でもわかるものならいいわけです。だから新聞の批評もそういう立場でやっていたらいい、難かしいことはいらないんです。素直に見る立場でいいので、書く立場じゃないと思つてます。

小島 いまの話は補足すると——私と神津さんは同じ演芸番組を書いています。ラジオ番組も書いています。実際の問題としてライターのかかわり方は、各ジャンルの者が専門のことだけやっていると、ジャンルの越えてはかかわっているケースが増えています。放送作家の中にはドラマ専業者と、ドラマも書きバラエティもやるという人といいますが、後者の方が多くなっています。協会に入っていない人を含めると、テレビ、ラジオにかかわっている作家の数は大変なものになります。それが良くも悪くも現在の状況です。ギャラが安いといいますが、安くても作っているのは情熱だらうと思つてます。こうした多くの知られない作家のことを新聞で紹介してほしいのです。

御発言は？ 辻 ぼくの場合でいいますと、ぼくが脚本を書いた「ジャングル大帝」を佐藤忠男さんが批評さ

れたときに、実によくごらんになつてゐるな、とこれは感心しました。しかし、テレビアニメの新作物が、週二十八本という量産体制になつてしまつて、テレビ全体として量的に無視できなくなつた。それにもかかわらず批評がでない。たまにでた批評はトンチンカンの場合が多くて、批評を参考にしても良いものをつくらうとしてゐる若い連中が、なんだ、ちゃんとした人はロクな見方をしてくれない、というふうになつてしまふ。それでは困るので、テレビアニメの正しい方向づけをしてくれる人がほしいといった状況です。

かのう ここで、企画でメシを食つてゐる岡田さん、企画の話を中心に、それでしめくりにしたかと思ひます。

岡田 放送作家には大きくわけて農耕民族型と狩猟民族型の二つがあると思ひます。今は専ら農耕民族型の全盛時代で、与えられた土地で勤勉に視聴率をあげる、ともかく年貢を納めて、みかえりと次の耕作の権利を確保する、といった、小作人根性に徹したのが全盛を誇つてゐるといえます。作家の本来の仕事はプロデューサーライターというか、番組を高所大所に立つて創るといふ、クリエイターとして

の部分をつ十二分に發揮することだと思ひます。原稿用紙の上に文字を書くだけではなくて、ある番組のキャラクターとか、フォーマットを先ず創造する人間

があり、それにいろいろな経験者が加つてストーリーをつくりしかる後に、それを脚本家が原稿にするという——外国ではこれが常識ですが、こういうふうにならなければいけないと思ひます。日本では何もかもを一人の作家に預けてしまつて、ひどいプロデューサーになると、原稿ができるまで何も知らないといふことさえあります。テレビ制作のなかで、いちばん古いのがこのジャンルだと思ひますが、私は脚本家の肝心の部分であるキャラクターやフォーマットの創造、つくりあげる仕事を多く手がけていこうと思ひます。

もっと話し合う機会を

かのう 放送作家がいろいろな顔をもつてゐることがおわかりになつたと思ひますが、いままで放送作家とはこういうものだと思つていたが、こうだったのか、というようなことがあれば、一言ずつお願いします。

横山 大変有意義な会でした。いままでわかれわれ新聞記者の怠慢もあつたと思ひますので、こ

ういう話し合いを今後も続けていきたいと思ひます。

吉池 いろいろお話をきいてゐると、一体、テレビ局員は何をしてゐるのだ、とわからなくなつてきたところなんですけど。

岩切 これからもこういう機会があればどうなのでしょう。つまらないことでも続けておれば何か出てくると思ひます。一回で終つてしまふのは無意味です。つけ加えていえば記者クラブには広いスペースがありますからいつでもみなさんに来ていただいて、気軽に話し合う機会をこれからも大いにもちたいと思ひます。金をかけないで、一時間でも二時間でも話し合うという集りを長く続けることだと思ひます。

坂本 いろいろ話をうかがつてゐる中に、大変広いジャンルがあることがよくわかりました。また皆さん、非常に個性的ですね。その個性的な部分がどうしてテレビの中に生きてこないのでかと思ひます。不思議なところもあります。テレビ局のプロデューサーは何をやつてゐるのかといふたいくじになります。記者クラブはNHKの中にもありますが、ぜひともお越しください。お待ちしておりますから。

松田 放送作家の方は、もっと紳

士ばかり……寺島さんは別ですが(笑)紳士ばかりと思つたら攻撃的でもあり、自己宣伝力もあり、大変見直したわけですけど、これだけのエネルギーをもつ方々ですから、その力を放送界の番組づくりの中で大いに發揮していただきたいと思ひますね。

森永 私は記者の方々にお礼を申しあげたいと思ひます。NHKで放送劇選集というのが出ていて、その編集をした一人です。NHKで昭和十四年三月に放送劇をはじめて放送した直後、一般から募集したラジオドラマがありました。募集したのはNHKでなく朝日新聞です。次に毎日新聞が募集しました。その後、はじめてNHKが懸賞募集したんです。このように新聞社関係の方々に関心をもつて、日本の放送文芸にいろいろ貢献してくださつたわけです。

その各新聞社の方々と、現在の放送文芸について話し合う機会ができたことは大変嬉しいことだと思ひまして、蛇足みたいなことになりませんが私から一言御礼の言葉を申し上げたいと思ひます。

かのう ではこれで座談会を終ります。いろいろ有難うございました。(文責・広報委)

あとがき

放送文化向上のため、放送に關する各ジャンルの方達との交流を深めようという拡大研究委員会。

第一回が「ラジオの会」だったので、今度は「テレビの会」というのが順当な所ですが、今回は特に広報委員会との協同主催。新聞記者を囲む座談会もタイムリーじゃないか、ということになりました。当日は五社のベテラン記者諸士のご出席を得て、和やかな中にも、有意義な集いとなりました。

これはその会のご報告です。ごらんの通り、座談会は主として作家協会のPRに終つた感がありますが、会の終了後、会員が個々に記者の方達と交流を深め、情報を交換し合つたと聞いております。又、この会をきっかけに、放送作家の仕事に対する記者側の関心が高まり、お互い気軽に電話し合つて取材したり、情報を伝える等、緊密な交流も始まつてゐます。

一度だけで成果を云々することはできませんが、この会が一つのきっかけを作つた事は確か。放送に係る様々なジャンルの方達との交流を今後も深めて行きたいと思つてゐます。みなさんのご参加をお待ちします。

(放文研)